レスリングに魅せられて……
鳥羽Jrク 石田博子さん、大田淑子さん

レスリングに熱中する我が子を見ているうちに、レスリングのとりこになってしまったお母さんは珍しくない。その第1号は、90年秋に44歳で試合出場を果たした村田智子さん（東洋大倶楽部）だろう。

第1回中部少年選手権に出場した鳥羽ジュニアクラブから、村田さんに匹敵する熱狂的な〝レスリングお母さん〟2人をピックアップしてみた。

＊　＊　＊　＊

今夏の全国少年選手権（東京）幼年の部23キロ級で優勝した石田智嗣君のお母さん、博子さん（31）は中学時代、バレーボールの選手。スポーツへの興味はあったが、レスリングというスポーツは「ツリパンで何かをするスポーツ」という程度の知識しかなかった。

しかし「子供がやっているのを見て、自分もやってみたくなって」と、約1年前、マットに上がった。練習相手は鳥羽高校の軽量級選手であり、主な指導者は同クラブのコーチで現役選手でもある植村久弥さん（90年インカレ・グレコ74キロ級優勝）。最初「2年続けたら面白さが分かってくる」と言われたという。

だが、熱中するのに2年かからなかった。昨年11月の全日本女子オープン選手権（神戸）で1分かからず、ことし4月の全日本女子選手権（東京）では2分かからずに、ともにフォール負けし「絶対に1勝する」と闘志が燃えてきた。智嗣君が全国大会で優勝し「刺激されています」と声を強める。

▲石田博子さんと子供たち

植村コーチは「率先して練習に来る。軽量級選手と互角近くにできるようになった」と言うから、11月の全日本女子オープン選手権（京都府網野）で、悲願の1勝なるかどうか期待される。

夫の隆宏さんは中学の体育教師であり、スポーツには理解がある。「今辞めたら何もならない」と励ましてくれるそうだ。「1勝」するまでは、やめるにやめられない状況だが、一生続けたいという気持ちがあるようだ。「バレーボールでは、ママさんバレーの大会があるでしょ。夢かもしれませんが、レスリングもそんなふうになってほしいと思います。レスリング、と言えば、男女の両方あるのが当然というくらい女子レスリングが盛んになってほしいです」と言う。

＊　＊　＊　＊

その鳥羽クラブの代表に名を連ねているのが大田淑子さん（35）。4年生の長女をはじめ3人の子の母親だ。

高校～大学と新体操に親しみ、現在も鳥羽高では新体操部の顧問をやっている。しかし、末っ子の長男・隼希君が3歳の時の91年、同校教師の藤瀬勝信先生や植村先生（前述）が鳥羽ジュニア・クラブを開講。泣き虫を直して体力をつけさせるためにやらせたのがレスリングとの直接の出会いだった。それに合わせて2人の姉もレスリングを始めた。同僚教師の熱心さに誘われて事務手続きを手伝っているうちに、同クラブの代表に推されたという。

隼希君は3年間で10個を越えるメダルを獲得。長女・栄里さんは8月の全国少年選手権女子4年生34キロ級で優勝し、今回の大会では次女・友香さんと姉妹で決勝を争った。当分レスリングから目が離せそうにない。

バドミントンをやっていた夫は、今ではレスリングに熱中。全国少年選手権は仕事の都合で来れないはずだったが、仕事が予定より早く終わるやいなや新幹線「のぞみ」に飛び乗って応援に駆けつけた。今や完全な〝レスリング一家〟だ。

2人の娘には、いずれバレエか新体操をやらせたい気持ちもあるという淑子さん。「最後は本人の希望にまかせます。レスリングをやめたかったら、やめてもいい。でも、中途半ばは絶対にさせません」。

この大会の翌日には、新体操の指導が待っている。主婦業、母親業とともに「毎日が忙しい」と言うが、子供達とともに歩む〝レスリング人生〟に満足感があふれていた。

◀石田さんと大田淑子さん（左）